

金子彦二郎著「平安時代文学と白氏文集、句題和歌千載佳句研究篇」
に対する授賞審査要旨

本書は、平安時代に於ける和歌詩文と支那文学、特に白樂天の詩文との緊密なる関係につきて研究せるものにして、第一序説、第二句題和歌の研究、第三千載佳句の研究、第四研究資料篇の四部より成る。しかして本書の中心は、其の第二、第三の両部にあり。

第一序説は、廣く日本文化の特質と、外來文化に対する考察とを試み、本研究に於ける目的、対象と其の規準とに及び、専ら平安時代の詩歌と、白氏文集との關係に就きて論究せり。

第二、句題和歌の研究は、章を設くること八、各部面より精細なる考究を加へたり。即ち、万葉集中に既に存する同趣の種の歌詠を初め、白詩關係歌としては、六歌仙時代より寛平御時后宮歌合の歌人等の和歌の中に、既に多く存せし事実、後世の文学に対する影響等につきて稽へ、かゝる特殊なる歌集の出現すべき環境と時勢とを、其の序記奏狀につきて剖析を試み、次にその原典を決定し、異本の校合に就きての問題を解剖し、これが統計的表次を試み、更に、句題和歌百十五首中、七十四首の白詩句につきて、白氏文集に於ける所屬詩卷、句数等を討究し、且つそれらの詩句が、後世の国文学に及ぼせる影響を検討し、勅撰集と千里の和歌との關係を明かにし、次に同一句題に於ける後世の作品との比較研究を試み、その文献的價值を論述せり。

第三は、千里と叔姪の關係にある大江維時の撰なる千載佳句の研究にして、之を六章に分ち、まづ撰者の小傳及び其の著作につきて述べ、維時に、皇朝詩人の七言律詩を纂輯せし日觀集廿卷の存せしこと、其の自作の現存

せる詩文中に、白氏文集と密接なる関係の存すること等を明示し、千載佳句收載詩句と、千里の句題和歌の句題との類同関係につきて之を表示し、次に千載佳句收載詩句千百十首中白詩が其の約半数なることを述べ、また和漢朗詠集等に於ける白詩句踏襲引用の情況につきて、数字を挙げて討究し、白詩句の分布状態が千載佳句二百五十八項の部門中、其の四分の三に相当する部門に亘れることを例証し、收載部門、掲載句数等に関して全唐詩、全唐詩逸と比照研究せる結果を表示し、收載作者等の時代背景に対する考察を進め、白樂天を中心とせる中唐時代が圧倒的優勢を示せる事實を闡明し、千載佳句成立年代の書誌学的研究を了へ、我が国民性情、国民思想と深く契合せる所以につきて、検討を試みたり。更に此の研究底本の由來等を略述し、千載佳句が、全唐詩以上の内容を含有せるものあることと、平安時代詩文盛期に於ける文学界の特質と動向とを闡明し、其の撰者維時の文功を力説せり。

第四、研究資料篇は、研究調査表と、校定灑刻本とより成る。一は白氏文集に關係ある平安時代の句題、詩題に關する研究調査表、二は、類聚句題抄及び平安時代の詩集、其の他の記録に見ゆる句題、詩題と、其の作者、出典に關する研究調査表、三は、著者が最善本と確証して校訂せる句題和歌、千載佳句二書の灑刻なり。

以上を本書の梗概とす。今これを通觀するに、著者は、平安時代文学の論究上、傳寫の久しき、魯魚の錯誤等の爲に顧みらるゝこと少なかりし句題和歌、千載佳句の両書に就て、先づ其の原典整理の事業を完成し、之を文学史、文献学、書誌学、国語学、国民精神史等の各方面より研究論証の歩を進め、我が日本文化及び文学の特質、国民精神の優秀性、日支文化の一体不可分なることにつきて、究明せるものにして、且つその研究方法は、力めて統計乃至数字的実証法を採用して一生面を開き、また上掲両書並に撰者なる千里、維持両文学者の地位をたしめ、また白氏文集流行の來由、三代集中に句題を附せるまゝ、收載せざりし理由、千載佳句部門の性格論等、概

ね妥当にして示唆に富める識見を示せり。なほ千載佳句の校勘の如きも、嘗て其の傳寫本に、跋文を記せる林春齋も之を果し得ず。後、市河寛齋が着手せしが、その所依の謄本誤謬脱漏多かりしを、著者が博搜精査の結果、全唐詩に見えざる逸詩三百四十九首を発見補訂せる勞績も亦多とせざるべからず。

唯、本書の所論を見るに、白氏文集の影響を強調するに過ぎたること、千里の和歌学史についての洞察の稀薄なること等の缺点なきにしもあらず。又所謂菅江兩家と並び称せられて、同じく当時文学界に雄視せし菅家の名流が、白樂天の詩文に対して營みし攝取醇化の態様並に作例等との比照研究に及ばざること、千里の和歌そのものに就て洞察の透徹せざること、白樂天の唐土文学界に於ける力量又その詩品の評薦を参考する用意を闕きたること等の缺点なきにしもあらざれど、著者が刻苦して事に磨りしこと、研究方法の新味に富めること等、その業績の卓抜せるを示せり。

以上の理由に依り、本書は授賞の價値あるものと認む。